日刊 動労千葉

83, 1, 27

No. 1251

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二(22)七二〇七

臨調・行革粉砕！　三里塚ジェット闘争勝利！

『具体的核心部分』でことごとくゆきづまった検察側

1/25 第14回「6・12デッチ上げ事件」公判開かる

☆☆☆☆☆☆☆

被告側の明快な主張の前に 反動検事 佐々木タジタジ…

第一四回「6・12デッチ上げ事件」公判は、一月二十五日千葉地裁において、午前・午後の全一日、法延内外で果敢に闘われました。今回の公判では、前回に引き続き、篠塚（康）・吉岡（一）両君の被告人質問が行われ、動労「本部」革マルの反労働者性＝警察労働運動と、これとゆ着した権力の全く不当な弾圧に対して、最後的に暴露弾劾し、われわれの側の証言はすべて終了しました。

デタラメなデッチ上げ告訴の実態を暴露

午前十時、まず証言に立った篠塚君は、6・12当日、定期健康診断を受けるために助勤先の佐倉機関区からたまたま津田沼電車区に来ていて、「事件」にそう遇したというだけで、嶋田誠らの全くデタラメなデッチ上げによって不当な告訴ー逮補ー起訴を受けたことを怒りをこめて弾劾し証言しました。この証言を聞いていた裁判長ですら、「役員でもなく、歓迎行動に参加要請された訳でもない一組合員がなぜ告訴されたのか一寸理解に苦しむ」と言わしめる程「本部」革マルの嶋田誠の全くデタラメなデッチ上げ告訴の実態がありますところなく暴露されたのです。

また、例の反動検事佐々木は、篠塚君の行動に関する質問の範囲を完全にとびこえて、「動労千葉津田沼支部は、職場で年に何回位職場集会をやるのか」「三里塚集会へ参加したことはあるか」などと質問するなど、公安担当検事としての本性をむき出しに労働者・労働運動に対する言語道断な不当介入の姿勢をみせつけたものでした。これからのことをみても明らかな通り、反動検事佐々木は、動労「本部」革マルと一体となって、わが動労千葉への組織破壊を唯一の目的として公判に臨んでいるということです。

「事件の核心」部分で完全にゆきづまってしまった反動検事佐々木

続いて、午後証言に立った吉岡（一）君は、6・12当日の、われわれ側の全行動を、明確に立証し、動労「本部」革マル反動分子嶋田・斉藤らの百パーセントデタラメな、デッチ上げ証言を完璧に粉砕しました。

この完璧な証言で、どこにもつけ入るスキがなくなってしまった反動検事佐々木は、質問にことを欠き、なんと「80年4・15」（動労「本部」が津田沼支部の春闘前夜総決起集会破壊のために東京から大量動員で押しかけてきた事件）のことなどを持ち出し、クダクダと言及するにおよび、いらいらした裁判長に「何を言いたいのかわかりません。関係のない質問でしょう」とたしなめられて大恥をかくありさまでした。

例によって、突ピな質問を浴びせて被告を混乱させて自分のペースに誘導しようというこ息な〝佐々木式誘導尋問〟の目論見がみごとに粉砕されたあげくのはて、「『谷水検面調書』（谷水とは6・12当時、津田沼電車区入口付近のアパートに住んでいた主婦であり、現在は他へ移住している人である。よくわからないからはっきりした証言はできない、と証言をいやがっている本人に対して、検察側は、はるばる遠方の自宅にまで押しかけて、一月十九日、いわば密室審理を強行した）を見てから被告が証言を変更したのではないか」などととてつもない事を言いだし、言いがかりをつける始末でしたが、吉岡君はき然として、「検察官が密室で勝手に作・文した谷水検面調書など自分は見てもないし、見ることもできない」ときりかえすと、佐々木は、グッと言葉につまってしまうありさまでした。こうした事態を憂慮した裁判長質問の方が長時間にわたるという前代未聞の検察側大混乱のていたらくの公判として終了しました。これは、検事佐々木自身が動労「本部」革マルの警察労働運動のよきパートナーであり指導者であること、また、この事件がもともと明らかなデッチ上げである事がはっきりしているので、かんじんの「起った事態の核心部分」の解明・立証などできもしないし、またその熱意もないという、破綻的危機からくるあせりの姿であるといえます。

◇　◇

このように第十四回公判は、被告側全員の無罪と勝利に向かって前進しました。

なお、次回公判は、「論告求刑」となります。一層の闘いをもって完全勝利に向け前進しましょう。

☆☆☆☆☆☆☆

中江選挙闘争の勝利をかちとろう！
「一人5票獲得運動」を強化しよう！

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！